

「精神的充足・社会的適応力」評価尺度の縦断的活用の効果 —精神的充足と心理的レジリエンスとの相互影響に関する検討—

○加藤陽子 (十文字学園女子大学)

綿井雅康 (十文字学園女子大学)

キーワード：精神的充足，心理的レジリエンス，相互影響

問題と目的

「精神的充足・社会的適応力」評価尺度 (菅野・綿井, 2002) は, 結果シートを回答者 (児童生徒) に返却することで生徒自身の自己理解と自己改善を働きかけるという特徴を持つ。綿井・加藤 (2018) は, 回答者が自らの状態を客観的に振り返ること, また, 主体的に課題を見つけ解決に取り組むことは, 精神的充足や社会適応力を向上させるだけでなく, 情動制御や自他の理解力など心理的なレジリエンスを高めることを示唆した。ただし, こうした知見は横断的な実証によるもので, 縦断的な検討は行われてこなかった。回答者への返却の効果をより詳細に検討するためには, 縦断的な活用による効果検討が必要であろう。

そこで本研究では, 中学校の同一学年集団として, 本心理検査および心理的レジリエンスの測定を 2 年間にわたり反復して実施・分析することにより, 精神的充足・社会的適応力と心理的レジリエンスの間の関係性を検討し, 向上・改善の因果関係を明らかにすることを目的とする。

方 法

対象者 首都圏の公立中学校 2016 年度入学生。全ての検査と調査に回答した計 155 名 (男子 84 名, 女子 71 名) を分析対象とした。

調査時期 ①2017 年 10 月, ②2018 年 11 月。

実施内容 ①「精神的充足・社会的適応力」評価尺度 (菅野ら, 2002; 精神 3 特性 (「安心感」「楽しい体験」「認められる体験」), 社会 6 特性 (「気持ちを伝える」「自分をコントロール」「状況を正しく判断」「問題解決」「人とうまくやっていく」「人を思いやる」), 計 57 項目, 4 件法)。結果シートは回答の数週間後に LHR 等において担任教員からワークブックとともに返却された。②心理的レジリエンスに関する尺度 (石毛ら (2006) および平野 (2010) が作成したレジリエンス尺度をもとにした計 23 項目, 5 件法)。結果シート返却後に実施した。

結果と考察

「精神的充足・社会的適応力」評価尺度 (9 特性) の各合計点を求めた。心理的レジリエンス尺度は, 綿井ら (2018) をもとに, 拡張意欲的活動性, 内面共有, 楽観性, 他者理解の 4 下位尺度ごとに平均点を求めた。次に, 精神的充足の 3 特性と心理的レジリエンスの 4 下位尺度との因果関係

を推定するために, 同一変数間に遅延パスを引き, 次に精神的充足と心理的レジリエンスに交差遅延効果パスを引いたモデルを検討した。さらに社会的適応力の 6 特性と心理的レジリエンスとの因果関係についても同様の分析を行った。

分析の結果, 精神的充足と心理的レジリエンスについて, 同一変数のパスが有意であったと同時に, 2 年次の「認められる体験」が 3 年次の「他者理解」を, 2 年次の「拡張意欲的活動性」が「安心感」と「楽しい体験」を, 「楽観性」が「安心感」を, 「他者理解」が「認められる体験」を高めることが明らかにされた (Figure 1)。また, 社会的適応力と心理的レジリエンスにおいて, 同一変数のパスが有意であったと同時に, 2 年次「気持ちを伝える技術」と「自分をコントロール」は 3 年次の心理的レジリエンスに関与していることが示された。ただし, 「気持ちを伝える」は正の因果関係で, 2 年次に高いほど 3 年次の心理的レジリエンスを向上させる結果になったが, 「自分をコントロール」については負の因果関係となった。

なお, 加藤・綿井 (2019) では精神的充足の社会的適応力への縦断的な影響が確認されている。そのため, 事前に精神的充足によって高められた社会的適応力が心理的レジリエンスに影響を及ぼし, さらにそれが精神的充足に影響を与えるといった段階的な効果が推察される。この点については調査時点をさらに追加し, より長期的なスパンで検証が必要であると考えられる。

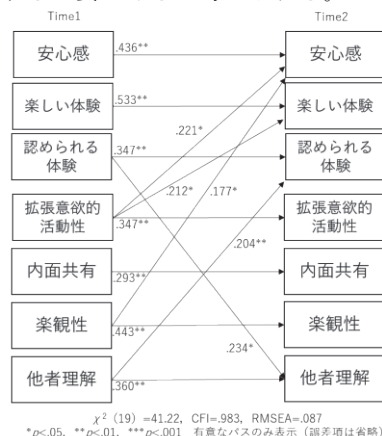


Figure1 精神的充足と心理的レジリエンスの相互影響性を検討した交差遅延効果モデル